慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	唯物史観批評
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.8 (1927. 8) ,p.1061(91)- 1107(137)
JaLC DOI	10.14991/001.19270801-0091
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270801-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三六年」を規定せざるを得なくなつたのである。

以上 Piers the Plowman を通じて第十四世紀に於ける英國の社會狀態を觀察した。以上の外まだ論ずべき點が少なくないが、思の外紙數を費したから、これを他の機會に讓る。吾人は當時の社會狀態に對する Langland の考へを眺める時、彼の思想が中世期に於ける眞面目な基督敎徒以上に出ないことを知る。すでに述べたる疫病流行に對する天罰說は云ふまでもなく、その商業に對する意見、貧民に關する議論、その最もすぐれたりと思はるゝ宗敎上の改革說にしても、恐らく當時の人々の胸裏に意識的に或ひは無意識的に存したるもの以上に出ないものであらう。然しそれだけ當時の英國人が將に國民的團結を組成せんとする途上の變遷を明かにする材料たり得る。故にこの Piers the Plowman の價値は第十四世紀に於ける英國の社會的スケッチを吾人に生々として示して呉れる點と當時の英國民の抱ける思想的傾向を示してゐる點にある。思想そのものに於いては Wyclif 等とは異なり、極めて平凡なものと云ふべきであらう。

（昭和二年七月十七日稿）

唯物史觀批評

平井　新

本稿は Erich Brandenburg.—Die materialistische Geschichtsauffassung, Ihr Wesen und ihre Wandlungen. 1920. の序文と脚註を除く全譯である。本書はブランデンブルゲが一九一九年十月三十一日ライプチッヒ大學總長就任の際に試みた記念講演の原稿に訂正補筆したものである。紙數僅に七十頁に充たない小册子ではあるが、唯物史觀に反對するが其の言ふ所、彼我共に獨特の史眼から簡潔明瞭に論評した才腕は遠に巨匠を思はせる。著者は結局、唯物史觀に反對するが其の言ふ所、彼我共に傾聽すべきもの甚だ多く、殊に終始、內在的批評を以て臨んだ著者の態度は敬服の外はない。譯者は必ずしも悉く著者の見解に贊同するものではないが本書から受けた啓蒙示唆の決して少くなかつた事を斷言する。小册子とは云へ唯物史觀研究の旺盛なる今日、其信奉者も其反對者も共に必讀す可き良著と信ずる。

本書を譯了したのは既に二年餘以前であるが今發表するに際して全く改譯した。此間絕へず示敎激勵を賜つた小泉、加田兩先生に深く謝する次第である。又拙譯の揭載を快くお許し下さつた高橋誠一郎先生に厚く御禮申す次第である。唯々吳〻も遺憾な事は未熟なる語學のために、誤解誤譯の個所少なからず、獨り原著者に禮を失したのみならず、又是等諸先生の期待に背いた事である。大方の御叱正を俟つのみ。

因に原書名は「唯物史觀、其本質及び變遷」であるが假りに標題の如く改めた。

目　次

一、唯物史觀の歷史

二、唯物史觀の敍述
三、上層建築の無力
四、マルクス及びエンゲルスの『唯物論』
五、心的生産力と觀念論的上層建築
六、經濟的動機と必然性
七、進化に役立つ一要因としての心的要素
八、自然的要素は發展方向を説明するに足らず
九、唯物史觀の第一の進展
十、唯物史觀の第二の進展
十一、結　論

一、唯物史觀の歴史

吾々の時代の様に斯く偉大なるもの、恐るべきものを體驗した時代には、歴史的事件の進行を支配してゐるものは果して、人間の思惟及び意欲と無關係な必然性、動かすべからざる宿命ではないか怎うかと云ふ古くして、永遠に新なる問題が特別の力强さで迫つて來る。此問題に答へるために企てられた多數の試みの中一つの特に吾々の注意を要求するものがある。蓋し、其れは同時に一つの大なる社會的、政治的綱領の科學的理論たり且つ科學的基礎たらん事を欲するものであるからである。余の觀る所に由れば何人も既に知れる如く、カルル・マルクス及びフリイドリッヒ・エンゲルスに依て社會主義的思想世界の理論的基礎とされた所謂唯物史觀が即ち之である。

舊來の諸體系と共に唯物史觀も亦其究局の意義に於いては未だ全く明確には決定せられてゐないのである。即ち獨り其價値に就てのみならず亦其正當の解釋に關して恒に激しい論爭が戰はされてゐる。斯説の信奉者も、其反對者も此論戰に參加した。或人は斯種見解の起源をマルクス及びエンゲルス以前に求めた。或人は此見解とスピノザ、カント、ヘエゲル、フォイエルバッハ、コムト、正統派經濟學者、近世自然科學並にダアヰニズムとの關係を研究した。かくて此思想家の一言一句に對して顯微鏡的研究を加へ、そのために、彼の學説系統全體の精神を顧みざる一種のマルクス文獻學が漸次發生せんとしてゐる。併し此體系の全體並にその最奥の動機からしてのみ個々の細目は正しく評價され得るものである。

余は先づ二三の著名なる事實を想起する。マルクス及びエンゲルスは一八四四年及一八四五年親密なる協力に依て歴史的發展の理論を發見した。其際常にマルクス、其精神的指導者であつた事は兩人の諸著を識れる者の何人も疑はない所であらう。而も此事はエンゲルス自身すら快く之を承認せる所である。マルクス及びエンゲルスは二三の論爭的著作の中に系統的概括こそ試みてはゐないが新に獲得せる見解を表明し之に對し彼等自ら劃期的意義を與えてゐる。殊にマルクスはプルドン駁著「哲學の貧困」の中で最も詳細に之を説明してゐる。「共産黨宣言」に於いても又此理論の本質が述べられてゐると言ふよりも寧ろ假定されてゐると言ふべきであらう。此問題に關する兩人の稍〻大なる共著は當時其出版者を發見しないで唯だ斷篇の儘に保存されてゐる。此事は著作全體の損失を充分に償ふに足らないものであると言ふ事は言ふを俟たない。十年後（一八五九年）初めてマルク

スは「經濟學批判」序文中に彼の見解の原理を二三の簡結なる、寸鐵的章句の中に總括したが此れ以上更に進んで其擴張を試みなかつた。一八六七年年公刊された彼の主著「資本論」に於いても此理論は常に知られたものとして假定されてゐる。一八七八年「デュウリング駁論」に於て初めてエングルスは更に詳細なる敍述を企てた。彼は又此書で初めて唯物史觀なる名稱を用ひたのであつた。爾來唯物史觀は全學說と離るべからざる關係を以て發達し、此名稱を不適當と認める信奉者すら敢て之を放棄しやうとはしなかつた。

わけても此理論は哲學者、歷史家に在ては殆んど全く何等の注意を喚起するに到らなかつた。一八九〇年以來初めて之に對する比較的眞面目な研究が、かのバウル・バアルトの「ヘエゲルの歷史哲學及ヘエゲル派」を手初めに漸く現はるゝに到つた。老エングルス自ら此れが辯護の衝に當つた。フランツ・メエリング及びカウキツイも亦之を援助した。併し乍ら同時に社會主義者の一團から斯理論の擴張、加之、本來の見解の修正さへも必要だとの聲が起るに到つた。此聲はエドアルド・ベルンシュタインが之に加擔するに及んで可成り强い共鳴を見出すに到つた。法律哲學、經濟學及び倫理學的方面から漸次非難攻擊が增加し、之に關する文獻は殆んど迎接に遑無き程に增加するに到つたのであるが唯專門の歷史家のみは之に對して驚く可き程冷淡なる態度であつた。ランプレヒトの著作のために惹き起された激しい論爭に於いて彼は其反對者のために、往々唯物史觀の信奉者だと看做された。彼は此主張を拒否したが更に其多くの著作の中では仔細に涉てマルクス及びエングルスの理論を論評するには到らなかつた。爰ではマルクス及びエングルスの理論が新歷史記述法の實際に如何なる程度迄影響を及ぼしたかに就ては考察しない事にする。寧ろ吾々に興味ある問題は此理論が反對者の非難に依て、其自身矛盾に充てるもの、保持すべからざるものとして論證されしや否や、或は又信奉者達が斯る攻擊を刼けんとするの餘り、自ら此理論を根本的に造り變へてしまつたのではないか怎うかといふ事である。

歷史家にして見れば此理論の當否を歷史的事實に據て檢討したいであらう。唯物史觀の信奉者達に依て引合に出される歷史上の實例に就て此理論の證明力を立派な根據から非難する者があると、此理論の信奉者達は直ちに之を駁して謂ふ、此理論は個々の場合に甘く當嵌らないと言ふ理由で直ちに間違だと斷言することは出來ないと。又此理論と矛盾する實例を擧げる者があれば、之に對し汝は此理論の意味が分つてゐない、だから事實に應用が出來ないのだと應へる。其處で吾々は彼等の思想其者の關係を究明して此理論の價値如何に關し論爭の存する諸點を見出さんと欲するものである。

二、唯物史觀の敍述

唯物史觀の主要敎義を簡單に概括すれば次の如くである。

人類共同生活の總ての關係及び變化を決定するものは財貨生產の發展である。生活に必要なる財貨を生產する自然界及び人間界の諸勢力は總て生產力なる名稱の下に總括される。收穫を齎らす耕地、鋤を曳く牛、人間の勞働力、常に新なる勞働器具や勞働方法を創造する人間の頴智、並に意思力是等は何れも生產力に屬する。勿論耕地や牛は、之が人間に依て經濟的に利用されて、人間の勞働要具

に變ずる場合にのみ生産力である。是等の生産力は今や不斷の增加と改良を營みつゝあつて、此增加及び改良は强制的必然性を有する一個の自然過程に依て且究明し得べき諸法則に依て成就される。

生産力發達の其時々の狀態には必然的に一定の構造を有する生産關係が適應する。マルクスは此生産關係を經濟的經營の全體の組織と解した。例へば、近代的工場は一個の生産關係であるが如くである。生産力の其時々の狀態は生産者をして夫々一定の階段の下で、生産する事を餘儀なくさせる。勞働要具は『其中で勞働が營まれる社會關係の指示器である』。經營の組織と共に、勞働給付者に對する生産物の分配方法が根本的に定められてゐるから、財産關係とは畢竟、法律的見地より觀察したる生産關係に外ならぬ。此生産關係の總和が『社會の經濟的構造』を形成する。

富者と貧者、經濟的經營の指揮者と雇傭者との區別が社會階級の基礎であつて是等の階級は諸種の經濟的利害に依て相互に分裂し、必然的に敵對する。其故に社會の階級編制も亦究局に於て勞働要具の狀態に依て定まる。『手磨臼は封建諸侯を戴く社會を生じ、蒸汽磨粉機は工業資本家の社會を生ずる。』

一社會にの內部に存在する事實上の關係は其法律的表現を法律及憲法形態に見出す。マルクスは此れを一括して法律的、政治的上層建築と名付けた。『政治的並にブルジョワ的立法の布告は唯だ經濟關係の意欲を記錄する事に外ならぬ』。是等の立法は支配階級に依て作成されたもので、彼等の經濟的基礎に基く權力的地位を法律的に確定し之を出來るだけ永遠に保持するための手段である。

支配階級は最後に彼等の利益に適應する精神的雰圍氣を造り出す。宗教、道德、藝術、哲學の中に彼等の生活條件に適應する思考法を刻銘する。此文化領域は一見、獨立して、經濟的影響を受けないかの如く見ゆるが其實、一定生活關係の精神的沈澱物にすぎないものである。個々の藝術家、學者、僧侶は殆んど全く此關係を意識しないのを常とする。彼等は總じて觀念論的上層建築を形成する。かくてマルクスは抽象人の崇拜を主義とする基督教を商品生産者社會に適應する宗教的形態なりと說明し更に主張して謂ふ、良心及び宗教の自由の觀念は知識的領域に於ける自由競爭の支配を表明するにすぎず』と。

今や生産力は不斷に成長し、恒に新なる生産關係を創造するが故に、法律的、政治的、觀念論的上層建築も亦不斷に變化する。勿論此變化は、時に久しきに涉て漸次行はるために、諸制度及諸觀念が一見長い間何等變化しなかつた樣に思はれる場合がある。舊きものは鬪爭なくしては消滅しない。從來の支配階級は寧ろ新生産力の擡頭せるに不拘、舊來の財産關係、法律、憲法、及び思考法を維持せんと力める。爰に於いて、新生産力に適應する生活形態を總ゆる文化的領域に强ふる新生産力形態と益〻生産の桎梏となる傳來の制度。觀念との間に必然的に矛盾が發生する。此矛盾が歷史上に階級鬪爭として現はれ、軈て、此鬪爭は否應なしに新興生産力形態の勝利を以て終る。

世界觀若くは法律が獨力で發展するとするのは、マルクスに依れば誤謬である。彼の見解に從へば總て觀念若くは制度の變化は、生産力及び生産關係の根本に變化の行はれつゝある事を指摘した場合に初めて科學的に理解されたと考へられる。社會上の大變革は一見新思想の勃興に依て行はれるかの如く見ゆる場合が屢〻ある。併し眞正の因果關係は常に其正反對である。『共產黨宣言』は謂

ふ『社會を革命する思想を說くのは、旣に舊社會の內部に新社會の要素が形成せられ、舊生活關係の崩壞と同一步調で舊思想が崩壞しつゝあるの事實を物語るにすぎない』と。

三、上層建築の無力

此全觀念方法の本質は、歷史の進行を決定するものを唯一の發展系列、即ち生產力の成長であると觀ることに存する。之に依れば、總て他のもの――財產關係、階級構成、法律、憲法及び精神的生活――は之に依る一義的に決定されるものであつて、決して生產力の發達を妨げたり、其方向に影響を與ふる事は出來ない。最近社會主義者が屢〻引用するマルクス殊にエンゲルスの發言中にも動もすれば、彼等が生產過程に對する諸制度や理念の影響を認めて居たのだと云ふ風に解釋される節が無いでもない。併し吾々は決して斯樣な章句に迷されてはならない。何となれば個々の章句を解釋する場合に最も重要なるものは兩人の出發點となつた根本思想を措いて外にないからである。

彼等の歷史觀は彼等自身にとつて啻に一個の科學的理論たるのみならず又同時に彼等の革命的綱領の基礎であつた。彼等が歷史研究の目的は彼等の實現を努むる實際的變革の必然性を說明するにあつた。彼等は此歷史觀を基礎として社會主義社會の必然的に到來せざるべからざる所以を證明する事が出來ると考へた。彼等は爰にサン・シモン、フリエエ、プルウドン等の空想的社會主義者に對する彼等の進步が存すると考へた。謂へらく、是等の空想主義者達は社會主義を以て倫理的に見て最も價値あるもの、從て亦最も實現に努力するの價値ある社會形態であることを示して呉れたが、併し斯る社會が又事實上到來することを少しも保障するが出來なかつた。所が吾等は從來の歷史の經過から、恰も封建社會に代て資本家的社會が必然的に到來した樣に資本家的社會も軈て解體して社會主義的社會が之に代らねばならぬ事を證明することが出來たのだ。封建社會其自身の胎內に發達した生產力の成長が此封建社會を破壞し、生活及び思考の新なる樣式即ち資本主義的樣式を强いた樣に、資本主義の桎梏から解放された新生產力は又資本主義の破壞及び社會主義の實現に努力する事になつた。何となれば此新生產力の特徵に適應する新しい社會の經濟的構造は唯〻生產手段の社會化に依て初めて可能だからであると。此マルクス及びエンゲルスの中心的思想過程からして、生產力の發達は立法的手段や宗敎的、倫理的觀念等の力のために抑制されたり方向を變へられたりする事が出來るものと想像するならば其れは論理的足場を片端から打毀すといふものだ。何となれば、果してそうだとすれば資本主義の崩壞と社會主義の到來とは最早確實に豫斷出來なくなるからである。

吾々は、唯物史觀の主張する所は、一切の生產關係の變化は獨り、悉く一義的に生產力の合法的發達に依て定まる許りでなく、亦他の一切の生活關係も亦均しく一義的に生產の變化に依て定まるものであるといふ事を明瞭に理解して置かねばならぬ。一定の生產關係の下には唯一定の國憲形態、一定の宗敎的、哲學的、藝術的觀念しかない。此原理を餘り狹く或は餘り衍學的に解したり、又は憲法生活や、精神生活の極めて枝葉の部分に至るまで此方法に依て解釋することは勿論務めて愼むべき事であるが、しかし此全理論の地位や意味を喪はせまいとすれば、政治的、精神的生活の原理としても又保持しなければならない。だからマルクスが產業上での先進國は其の進步の後れた

る國に對し獨り經濟的方面に就てのみならず亦一切の生活範圍に就ても其將來を指示して與れるものであると言つてゐるのは全く正しい。縱令、地理的環境並に民族的資質の相違が個々の國民或ひは文化的方面に多大の差別を齎らすものであるとしても――マルクスも此事を充分認めてゐた――生產力の發達の程度が同一ならば一切の生活方面に現はるゝ特徵は皆同一でなければならない。其處に一切の人間社會に妥當なる發展樣式が存在する。之を認識することが歷史理論の任務であり、そして一定の時期に就て其の妥當性を個々に涉て證明することが歷史研究の任務である。

此事は一見極めて明白に見ゆるが少しく觀照すると歷史的過程の個々の部分――其內的關係こそは全學說の前提であるが――の間に著しい矛盾が生じて來るのである。

生產力の發展――之に對し他の總てのものが依存する――は一個の不斷の成長、成熟と觀ることが出來る。凡そ生產關係は暗遷默移の裡に變化するものであつて其相次いで發生する狀態は決していちいち明瞭に分るものではない。況して憲法形態、觀念の變化おやである。凡そ如何なる發展系列でも、其自身で完結するものはない、必ず新に生れて來る部分は、前の部分から漸次形成されて來るものである。寧ろ舊狀態は縱令、新生產力が形成されても其れが舊狀態を破壞する程の爆發力を得るまでは依然として存留するものである。それからして新生產力に適應する新なる狀態が舊狀態に代て生れる。併し乍ら其れは決して唐忽の中に、無用意に起るものではない。何となれば新生產力は啻に舊狀態の地底を掘て生れたものである許りでなく、同時に又、新なる法律並に思考形態に對する要求と努力を成熟させたものであるからである。かくて新なる法律、思考形態は今や何等の拘束を受けないで發生して來る。併し乍ら從來の社會の牛耳を取れる階級に依て背負はれてゐる舊狀態は意外に久しく殘留する。爰に於いて新なる生產力に適應する新なる狀態が形成されるに先て、新生產力が此の石化せる外殼を强力的に破壞しなければならない。

斯樣に生產關係、國家形態、思考方法の變革は一聯の革命に依て行はれる。マルクス及びエンゲルスがヘエゲルの表現法を借りて言てゐる樣に、舊狀態が一個の新なる狀態に變革する。

併し乍ら余の見る所では、此全觀念方法は必ずしも統一ある且つ首尾一貫したものとは怎うしても思はれない。マルクス及びエンゲルスは恐らく、舊來の生產力が全く跡形もなく消滅して、全く新なる生產力が之に代て忽然と現はれるとでも思てゐるのであらう。併し實際に於ては、舊生產力は斯樣に一變するものでは無く、依然として元通り保持され、唯、新なるものが附け加はるだけであるから、此上に立つ舊制度や觀念領域も亦當然一部は其儘保留されるに相違なく、唯、新なる補充、變形に依て完全なものとなり、複雜なものとされるに過ぎない。處で新舊狀態の不調和を平均させるものは唐突急激な革命ではなく、漸進的改革であつて、之が變革の規範的形式たるものであらう。實際に於いて機械が考案されても舊生產力――鋤曳く牛、單純な道具を用ふる手工勞働、漁獵、狩獵其他――は全く其姿を潛めるものではなく、寧ろ是等と竝び存して而も全體の生產に對し或る程度の効用を有する。而も又此事實が單に一時的狀態であり驟て結局は、一切の勞働が機械に依て行はるゝに到るだらうとは必ずしも首肯出來ない。

之に依て見れば、革命に依る生產關係並に上層建築の變革は決して唯物史觀の根本的前提から生

する必然の結論ではなく、且又全體の觀念方法を建て直して前述の樣な意味に解する事も強ち不可能ではなく否斯く解することこそ恐らく其眞意に近いものであると主張しても決して誤謬であると自分は信じない。現在に於いて舊關係の勢力に依て破壞するの外ないとの信念を直ちに彼等の理論として概括させたものはマルクス及びエンゲルスの革命的情熱であつた。彼等は此革命的展開を是認するために好んでヘエゲルの辨證法及び「否定の否定」を攝んだ。併し彼等が此學に出でたのは、當時の關係を明瞭に意識したからではなく、此時代の偉大なる思想家に否應なしに心醉したためであつた事は勿論である。其んな譯で彼等の理論は決してヘエゲル哲學より成長したものでは無く、又其萠芽に於いても之に類似したものではないと思ふ。彼等の理論は單に此のヘエゲル哲學の一斷片を發で今一度上層建築と歴史の原動力との關係に立戻て之に對するマルクス及びエンゲルスの眞意を述べて置かう。マルクス及びエンゲルスに依れば上層建築は自己の存在に依り一時は生産力の成長を妨害し、阻止するが併し何時までも新生産力の發現を妨げたり、或は其の方向を決定する事は出來ない。上層建築の生産力に及ぼす影響は精〻此程度のものであつて此限度を超ゆるものではないと。

四、マルクス及びエンゲルスの『唯物論』

爰にもつと重要な問題は此の怖しき重さを以て人間の運命を決定する力、即ち生産力の本質如何といふ事である。爰にこそ唯物史觀を理解し、批評するの秘鑰は存する。

多數の人々はマルクス及びエンゲルスに依れば生産力の發展は人間の意識及び意圖の共同作用なくして行はれる一個の過程であると信じてゐる。斯種の解釋は、既に述べた樣にエンゲルスの使用した「唯物史觀」なる名稱や更に兩思想家の著作の中で精神的文化の諸現象を人間意識に於ける社會關係の反映であるといつてゐる二三の章句を典據にしてゐる。更に吾々を誤り易いのは、兩人が『物質的關係』と云ふ樣な言葉を屢〻人間の觀念や思考と對立する經濟的狀態の謂に用ひてゐることである。そこで斯樣な典據を楯にして直ちにマルクシズムを哲學的唯物論――この唯物論に依れば、物質的世界に於ける諸般の變化は、唯單に物質的原因に依てのみ惹き起されるものであつて心的過程は唯單に物質的變化が人間の意識に映じた隨伴現象か左もなければ其映像に外ならぬものである――の一派と速斷する。そこで此世界觀に對して向けられた面倒な非難は亦マルクシズムにも當嵌らなければならぬと。

所が問題は斯樣に簡單に片付くものではない。マルクス及びエンゲルスは人間の意識的、計畫的行爲は凡ゆる歴史的因果關係の重要なる且つ有力なる部分であるといふ事を度々明言してゐる。彼等は正しく此點にこそ自然過程と歴史過程との重大な差別を認めてゐる。彼等は自然科學上の諸發見や技術上の諸發明を以て生産過程の最も有力なる槓杆であると認める。斯樣に彼等は唯物論が徹頭徹尾否認してゐる物質と意識といふ交互作用を認める。

然らば何故に彼等は自分達の事を好んで、唯物論の信奉者と呼んだのであらうか。彼等は唯之に依て、解釋の中に超自然力、並に超自然的原因を混入する事に極力反對の態度を見せ度かつたのである。彼等の思想的初舞臺の當時に在て此立場を最も明瞭に代表した者は唯物論者殊にフォイエル

バッハ（彼を嚴密な意味の唯物論者と觀る事が出來るか否やは尙ほ疑問の存する處である）であつた。彼等は極めて重大なる諸點に於いて此世界觀の代表者達と殆んど見解を同じうせるのを感知した。唯物論が當時の支配階級のために特に非難されたといふ事が却て彼等若き革命家を驅て唯物論を遵奉するに到らしめたのである。彼等の所謂唯物論は吾人が曩に屢〻力說した樣に、寧ろコムト、スペンサアの西歐的實證論に極めて類似せる見解方法である。之を除いてはマルクス及びエングルスは決して哲學者たらんと欲しなかつた。マルクス及びエングルスに哲學者と言ふ刻印を押付け樣としたのは却て彼等の亞流者達であつた。彼等の理論的哲學に對する造詣が比較的淺かつたことはカントの認識批判に關するエングルスの部分的に極めて淺薄な言明の示す通りである。彼は決して何か新なる世界觀を與へやうと欲したのではない。寧ろ社會生活の一個の新理論を與へやうとしただけである。從て彼等が經驗に依て其正當なる事を證明したと信じた此理論が何等かの哲學的體系の中に編入せられると否とは根本に於て彼等の全く問はない事である。彼等は又同時に全く唯物論者ではなかつたヘエゲルに對して常に尊敬の辭を措まなかつた。何となれば、彼等は他の重要なる見解即ち歷史の經過を理性に依て把握し得る、而も個人的意圖と無關係な全一と觀ると言ふ點に於いて彼と見解を同じくすることを感知したからである。

之に依て觀るが如く、マルクスの歷史理論は決して唯物主義的ではない。何となれば其れは心的要素即ち人間の顯智及び意思力を歷史の有効なる要素の中に算入してゐるからである。唯物史觀は人間の行爲を外界の刺激に依る無意識的反作用と觀ないで、寧ろ之を反省、熟慮、決意の結果だと觀るのであるから、この意味に於いて嚴密な機械論ではない。だから又マルクスが觀念論的諸形態を以て人間が之に依て舊狀態と新生產力との矛盾を意識し『之を征服する』その目安だといつてゐるのは決して單なる詭辯ではないのである。人或は謂ふ、勝敗が當事者の優劣に依て定まらない樣な鬪爭は決して眞劍な鬪爭ではない。こゝに二人が鏡の掛つてゐる室で互に相爭ふとする。勿論彼等の爭へる姿が鏡に映つる。併し乍ら勝敗は唯實際に爭へる鬪爭者の力量關係に依て定まる、即ち爰に當箱めて云へば生產關係及び生產力に依て定まるのだと。併しこれだけでは未だマルクスの眞意を充分に盡してゐないと思ふ。マルクスの見解は寧ろ左の如くである、言ふ迄も無く、本來の爭鬪者たる階級に結合せる人間は相方共に眞劍に、全力を擧げて、更に精神力をも傾倒して勝利を得んがために爭ふが併し乍ら其中一方が非常に物質的地位に惠れてゐる場合には反對者が必死の力を盡しても勝利の榮冠は當然彼の頭上に落ちて來なければならないと。從來の支配階級の人々は此事實を理解しやうとしない且又理解することも出來ない。從て全力を盡して自己防衛に努力する。併し乍ら此事は彼等が結局沒落しなければならず且之と共に彼等が永劫の眞理と思ひ込んでゐた彼等の思想も沒落しなければならぬと言ふ事を決して妨げるものではない。

『唯物史觀』といふ名稱が不適當であることは其熱心なる信奉者自身も夙に之を感知し之を是認してゐる。其んな譯で各種の名稱が持ち出されたが何れもこれはと言ふ程のものは無かつた。而して將來に於いても成功しないであらう。何となれば、この名稱其者は社會民主黨の綱領となつてしまつてゐるからである。斯樣な譯で改名の提議の起る每に、其黨員に對して彼等の要素の基礎として

ゐる此理論の實際的內容の一部も亦放棄されたのではないかといふ疑念を起さして居る。

五、心的生產力と觀念論的上層建築

人間の思想及び意思行爲もかくて亦生產力に屬する、即ち歷史的生起の協同的要素である。然るにマルクス及びエンゲルスは、人間精神の最大の產物たる藝術品、宗敎、科學的體系は唯經濟關係の反映に過ぎないとも主張してゐる。一體是等のものを產出する同一の精神が又經濟關係を齎すのではないか。自然科學及び技術は既に生產力の概念に入れられて居り乍ら今一度「觀念論的上層建築」の中にも現はれるのではないか。一度は生產力と考へられ、他の場合には物質的生活關係の無力な反映と考へられては居ないか。若し然りとすれば生產力の發展も亦觀念論に依存するといふ事を是認すべきのが至當ではないか。そうだとすれば總ての他の關係を支配する發展系列は唯一であるとは最早言へなくなるし、唯存するものは歷史的生活の循環あるのみと言ふ外はない。若しそうなれば總ての生活領域は相互に影響を及ぼすものと見る可く、其何れにも獨立不羈の因果系列といふものはないと云ふ外はない。そうなれば彼等の全理論中最も重要な部分が明かに放棄されはしまいか。

多數の人々はマルクス及びエンゲルスは到底このヂレンマから逃れる事は出來ないと考へてゐる。謂へらく、而もマルクスは既に世界史から立派に說明されてゐる觀念論さへも態々再び生產力の裏門を潛らしたといふ事を事實上明かに氣付いてゐた筈ではなかつたか。斯るマルクスの態度は之を故意の詭辯だとすれば、マルクスの信實を傷ける所以であるし、之を無意識的の自己欺瞞だとすれば、思想家としてのマルクスの聰明を蔽ふ所以であると。

併し誤解は爰に存するのだ。事實上マルクス及びエンゲルスは嘗て自然科學及び技術をば觀念論的上層建築の中に算へ入れた事はなく、常に生產力の中に入れてゐた。彼等は觀察に依てのみ實在を把握し、其法則を確定し得可き科學と所與を超越する解釋と評價とを常に區別した。縱令、宗敎的、藝術的、科學的形態を纏へるとを問はず、彼等が觀念論と呼んだのは唯後者許りである。爰では人間は最早實在や其眞實の要求に支配されないで感情、欲求、空想に支配さるる。爰では人間は眞正の科學を造るのではなく彼が主觀的に眞理だと思ひ込んでゐる幻像を造り出す。此幻像は眞理及實在をば普通人の眼では透視することの困難な雲霧を以て隱蔽する。此意味に於いて自然科學は、經驗に依て證明し得べく、而も行爲の規準となる敎義を提示する限りに於て有益なる認識として妥當し得る。併し乍ら自然科學が原子の本質を決定したり、普遍的世界觀を展開せんとするに至れば、其時から又觀念論になつてしまう。マルクスに依れば、人間精神の信賴すべきは、唯〻之が生存意思の要具として實際生活を構成する場合に役立つからである。彼等の見解に依れば人間精神が一度實際的狀態に對し純理論的に解釋を加たり、倫理的評價を與えたりするに到れば全く用をなさなくなつてしまう。此見解はショオペンハウエルやプラグマテイズムに見出さるる見解と根本に於いて全く同一である。

吾々は此マルクス及びエンゲルスの思考法に對しても强き反對を唱へる事が出來る。今日既に明かなるが如く總ての原始的知覺にも、科學的觀察にも、又事實を全く機械的に『證明』する場合にも

常に主觀的要素が著しく這入り込む。既にこの場合價値評價が大なる役割を力める。一個の對象が、吾々の注意を促し、其注意を保持し、その對象に就て何が見られ、何が保たれ、何が重要視さるるかは既に觀察主體の選擇的、評價的行動に左右されるものである。觀察を結論の基礎とする場合でも、思考者の全人格が其の中に這入り込む。如何なる認識も、又如何なる科學も斯の如き假說設定の想像なくしては到底考ふる事は出來ない。其故に一方に於いて純粹の客觀的科學の領域と想像力の主觀的活動の領域との間には到底截然たる限界を設くる事は出來ない。要は程度の差違で決して本質上の差違ではない。だから後年に及んで技術的に極めて有用だと認められる科學的發見が、其學說の實際的應用の事など全く念頭に置いてゐなかつた純粹の理論家に依て屢〻成し遂げられた。否恐らく眞に偉大な發見は斯かる學者にこそ初めて好く成功するものである。何となれば思索の焦點を實際的目的に集中することは視野を狹隘にし、空想を束縛するからである。

マルクス及びエンゲルスが外界を有體に確定し、その法則を研究する科學と、實在を主觀的要素を以て完成し、從て單に表面眞理を造り出すに過ぎない觀念論とを截然區別したのは、彼等が這般の事實を知悉しなかつたからである。彼等は此區別を正當のもの、根據あるものと認めたればこそ、科學を歷史の共同的原動力と認め、觀念論を、實在を時折隱蔽する無力の雲霧と做し、自己の前提に矛盾の存することに氣が付かなかつた。この嚴格なる區別を誤謬だと考へる者ならば、觀念論を無力とすることが全く證明もされず又證明出來ない主張であることが分るに相違ない。

此事實を承認すれば他の色々の非難が唯物史觀の信奉者の立場から觀て、何れも論ずるに足りない事も亦分かる。尤もこの非難は科學と總ての他の精神的機能との嚴密なる區別を承認しない人でも往々之を是認してゐる。

斯種の非難の一例を擧げれば、唯物史觀も人間思考の產物であるから觀念論にすぎない。即ち一階級プロレタリアの世界觀である、從て一定經濟關係の單なる反映に過ぎない。だから必ずや此關係と共に消滅し、新なる觀念論に道を讓らなければならぬ。唯物史觀を生產關係の變化から獨立した眞理と做せば、自己の根本的前提に對して矛盾を犯すことになると。此非難はマルクス及びエンゲルスに取て全く簡單に片付く問題である。彼等の理論は觀察を基礎とした認識であり自然法則と全く類似せる一社會法則の提唱である。唯物史觀は科學の一斷片であり、從來の歷史に對する解釋で又同時に社會的生活の過程を豫定し、左右する一個の生產力である。之あるに依て、從來無意識的に造られた歷史を意識を以て造る事が出來る。固より其經過を變化する事は出來ないが、之を短縮し圓滑ならしむる事が出來る。其故に唯物史觀は觀念論に屬しない。

或は唯物史觀は時代の經過と共に益〻不合理とならなければならない。何となれば自然法則、社會法則に對する認識が增加すれば歷史の經過は一層明白になるし、又一層思ふ通りにもなる。左すれば全體の經過に對する人間意識の影響が增加し、盲目的力の作用は減退すると。この非難の誤れる事も亦同樣である。マルクス及びエンゲルスが人間精神は歷史過程を決定する諸要素の一であると主張した事がなければ此主張は或は正しいかも知れない。

斯種の問題で比較的面倒な問題は、マルクスの理論に依れば觀念論は、自然法則、社會法則の認

識が一定の程度に達すれば、一般に消滅するものであるかどうかといふ事である。そうなれば、科學に基く將來の社會に於いては何等の宗教、哲學、最後に何等の藝術も存在しなくなり唯〻存在するものは科學のみとならうと。併し余はマルクス及びエンゲルスが斯樣な見解であつたとは信じない。何となれば、彼等は宗教、哲學、藝術が其自身經濟關係の單なる反映であるとも主張しないし又斯る精神現象は、是等の經濟關係が尙ほ未だ明確に理解されない間だけ可能なものであるとも主張しない。何時の時代にも宗教的、哲學的觀念を造り出し、生活感情を藝術的に表現するものが人間の天賦の資質であり、從て民族や個人の構成の上にも各種の相違の生ずる事は彼等の殆んど異存なき所であつた。彼等の主張は唯　次の如くである。即ち、一定時代の神に對する觀念や究局の原因及び價値に關する觀念の持てゐる一定の內容、更に詩歌、音樂、造形美術に表現さるゝ一定の內容は、是等のものが事實上體驗するもの、是等ものが生活する關係、結局に於いて生產關係に依て定まるといふ事である。彼等は人間が一般に何故に宗教的、哲學的、藝術的價値を創造するかを、其理論に依て說明しやうとするのではない。斯の如きは民族心理學的研究の任務とする所であらう。彼等の明かにしやうとしたのは一定時代の人間は何故に特定の價値觀念を齎して他の價値觀念を齎さないのか、將又何故に次の時代には、又違つた價値が現はれるかといふ問題である。彼の見解に依れば此事實は、宗教的感情、哲學的思考、或は藝術的制作意思が變化したために起つたのではなく、生活關係更に全生活方法が變化したから起つたのであり、舊觀念方法が新なる關係に最早適應しなくなつたから起つたのである。斯の如き解釋が事實上果して滿足すべきものであり、實行出來るものであるかどうかは疑ひ無きを得ないが、兎も角も此れが正しくマルクス及エンゲルスの見解である。

法律的政治的上層建築に就ても亦同樣である。マルクスは人間が何時の時代でも共同生活を營むために法律と秩序を必要とすることを決して否認しない。併し人間が一定の時代に一定の法律を作ること、例へば獨逸人が十五世紀に羅馬法を採用し始めた事、マルクスは此事實をば生活關係、結局に於いては生活過程に既に變化の起つた事實から說明し得ると信じた。

彼等の考へ方から見れば、マルクスの理論には人々が指摘する程の重大なる內部の矛盾はない。彼等の根本的前提は縱令、議論の多いものかも知らないが、彼等の理論を公平に批評するには一應此根本的前提を是認し其到達す可き結論を研究しなければならない。此見地に依て初めて、眞實に主要問題が一目瞭然と現はれて來るであらう。吾々は更に進んで此問題を決定しやう。

六、經濟的動機と必然性

既に知る通りマルクスに依れば、生產力の發展は合法的に、而も何等の拘束を受ける事なく確定的方向を取て行はるゝものである。生產力の發展は常に一個の自然過程即ち人間の目的設定並計畫に關係無く必然性を以て行はるゝ生起とされてゐる。然らば此事實と各種の目的に向けらるゝ人間の意識並に人間の意思も亦此生產力の一部をなすとの假說とは如何にして調和す可きものであらうか。人間の意思に依て此生產力發展の方向を少しでも變へる事は出來まいか。經濟的動機以外の動機が勝を制して人間をして生產力の發展を抑制したり、或は經濟的見地からは到底豫測し得ない方向を採らしむる可き行爲をなさしむる事は出來ないものであらうか。出來ないとすれば勿論生產力

の發展は最早豫測することは出來なくなり、之に依存する人間共同生活の變化も亦豫測する事は出來なくなる。

マルクスは個々の人間が極めて種々雜多の動機に依て動かされるのを決して否定しない。マルクスは、經濟的利害のみが有効な動機として現はれ、總ての理想的動機は虛僞であるとか、自己欺瞞であるなどとは決して主張しない。其れは彼の多數の門下に依て企てられた彼の思想の改竄であり曲解であつて、彼自身の決して預り知らぬ事である。彼等は到る處、取るに足らぬ利己的動機を鵜の目鷹の目で搜し廻て、人間の偉業を日常の茶飯事だと、けちをつけて自ら喜び、却て師說の價値を臺無しにしてしまつた。人間が非利己的な而も高尙な動機から行動する場合ある事はマルクス自身充分に之を認めてゐる。彼は唯、斯う主張するだけである。即ち、動機は行爲の結果如何を決定するものではない。人間の行爲は種々の動機から發生するものであつて、其大部分は全く正反對の結果に終てしまうものである。是等の行爲の中、人間の生活關係の發展に對して永續的の意義を持てゐる殘餘の部分だけが常に同一方向に作用するものである。此發展方向に逆ふ所の行爲は勿論縱令一時的結果を齎らし、遲れ馳せ乍ら、作用を及ぼすが併し永久に事物の必然的過程を抑制する事は出來ない。マルクスに取つて重要なる問題は唯單に一般的發展の方向を認識するに在るのだから人間の動機を究明することは精々二次的の問題にすぎない。彼自ら次の事を明言してゐる。即ち、自分は社會の發展を自然過程と觀るものであるから、個人に社會關係に對する責を負はしむる事は到底出來ない事である。個人は縱令、主觀的には如何に此社會關係を超越してゐても、畢竟此關係の產物である以上に出でないものであると。

マルクスは經濟的動機が獨り優勢なものであり或は又經濟的動機が全く他の動機を排して獨り支配するものであるとは主張しない。唯、經濟的必然性が總ゆる主觀的動機よりも、事實上に於いても、究局の原因としても遙かに力强いものであると主張するに過ぎぬ。個人は勿論世界事件の擔當者に相違ないが、各種の動機や目的に依て動されるものである。併し個人と無關係な力が、縱令、個人が之を知ると、欲するとを問はず、彼を一定の方向に導き彼の計畫と努力とを彼の全く意圖しなかつた結果を齎らすための手段として利用する。此點はヘエゲルもマルクスも全く同一精神である。ヘエゲルの觀念の手品に該當するものは、マルクスに在ては不可變的法則に依て進行する生產過程の强制である。

マルクスに於て重大なる役割を有する階級利害も亦終局に於いて必ずしも經濟的動機では無く又一般に自覺的に握把された原動力でも無い。寧ろ其れは、個々の階級成員に向けられた客觀的必然性を以て作用する强制力である。個人は階級利害といふ此强制力の存する事を全く知らないで自分では全く別個の動機から行動してゐるのだと考へ而も實際にその積りで行動してゐる。所が此階級の經濟的狀態から必然的に發生する此利害が全階級若くは其大多數に特定の行動をなす可く强制してゐるのである。

マルクスの信奉者の多くは此事實を看過した。そして外的必然性を內的必然性に移し變へた結果としてマルクスの全く與り知らなかつた若くは全く二次的のものと考へられてゐた問題が彼等の前

に生じて來た。例へば全體の過程に對する個人の意義如何とか、指揮者との關係に於ける民衆の影響如何とか、又は經濟的動因と觀念的動因とは何れが强いものであるとかといふ諸問題が即ち之である。

七、進化に役立つ一要因としての心的要素

此過程に於ける心的要素の役割に關してマルクスの言ふ所を今次の樣に書き替へて見る。凡そ社會に共同生活を營む全人類は其生活に必要な財貨を生産しなければならない。此必要から一定の行爲が生れる。此行爲は文化程度の低い階段では、其必然性を自覺しないで極めて種々の動機から行はれ、文化が進むに連れて明瞭な認識から、而も發達を容易にし、促進せんとの意思を以て行はれる。生産の地位が自然の技術的利用の改良を必要とする場合には、之に必要なる發見、發明が早晩成し就げられる、通常此の場合には多數の人々が相協力するから、此勤務給付を社會的勞働の産物と見て差支へない。此給付を完結する人は唯だ一個の必然的過程の最後の行爲を行つてゐるに過ぎない。若し彼が之を爲さない場合には他の者が現はれて彼に代る。

之に依て觀れば人間の認識及び目的意識的行爲は缺く事の出來ないものであるが、原因の鎖の中にあつては僅に從屬的部分たるに過ぎない。斯樣にして是等のものは再び全く無力のものに抑し下げられるのではないか。此觀念方法が益〻普及すればする程、一切の行爲力を痲痺させてしまひ、結局完全な宿命論に墮すべきものではないか。兎も角も來る事が分り、而も必ず來るに相違ない事が分れば、何のために人間は態〻目的を定めて、其達成に犧牲を拂はねばならぬだらう。手の出し樣のない事件の經過を拱手して靜に之を忍從した方が無難で呑氣ではないだらうか。

若し此非難が當てゐれば唯物史觀は縱令理論としては依然正しくても、全く新なる生活樣式の實現を努むる政治の基礎として最早用をなさなくなる。若し將來國家が何等勞せずして必然到來するものであれば、此新秩序を準備し、齎らす可き組織を造ることも、之を實行するために鬪爭を說くことも、明かに無用であらう。

其故に此解釋はマルクス及びエングルスの意見に適合したものとは思はれない。彼等の理論は正しく革命的實行の基礎をなすべきものであり、新社會の到來を促進し、容易ならむべきものである。必ず來るべきものとても人間の行爲を俟て初めて齎す事が出來と云ふ事は彼等自ら了解してゐた。彼等は人間の行爲なくても、其結果が行爲した場合と同一であるとは主張しない。彼等の見解に依れば經濟的必然性は社會全體としての行爲を決定するが此社會を組織する各個人の行爲を決定するものではない。一例を擧げれば分る。

季節が變つて冬が來る。そうすれば人間は生活條件の變化に順じて自己の生活方法を否でも應でも變へなければならない。併しこの寒さに輕い着物を着たり又は一夜を野天で過したりすることは各自勿論お勝手である。唯だ我慢してゐれば健康を傷ふ位が恐らく關の山であらう。多數の者は意識的にしろ無意識的にしろ事情が變はれば又行爲を變へて之に順應して行く。此經驗を原則に表はして見ると、季節の變化は衣服住居に或種の變化を促す、此變化は全く豫定出來るものであると言ふ事になる。何れにしても衣服及び住居の上に變化が必然的に起る事は正確に豫言できる事である

から冬衣を買つたり、暖爐を備へ付けたりする必要がないといふが如き結論をば前記の原則から抽ぎ出す者は唯物史觀を宿命論的に解釋するのと同一の論理的誤謬を犯す所以である。何となれば此豫言は決して個々の場合に就ていつたのではなく一般に就て云つたのであつて、其意味は、豫言された結果は人間の行爲なくとも現はるるといふ意味でなく、大多數の人々は變化した關係に行爲を順應させるものであるといふ意味である。同樣に、新しき社會狀態が生れるのは、大多數の人々が生活條件が變化すれば又漸次其行爲や考方を替へて此れに働きかけるからである。之を拒む人は沒落するか少くとも何の影響を與ふる事はできない。全社會が必然的結論を引くことを拒めば、其社會の存立は長くはない。エンゲルスは謂ふ沒落の刑罰を受けまいとすれば此必然的結論を引かなければならぬと。

之に依て觀れば、心的要素がなければ社會狀態は成長しない。此心的要素は新なる狀態に適應する行爲を喚起するに必要である。併しそれは發展の方向を思ふ儘に決定することは出來ない。それは特に複雜な順應器である。併し乍ら大多數の人々の行爲を全體として觀察する場合に於てのみ心的要素は順應器として働くのである。社會の個々の成員は思想上に於いても行爲の上に於いても必然性の線を遠く離れて、現狀改革の任意的計畫を作り此の實現に努力するのは勝手であるが、此計畫は、發展の必然的方向に存する場合、換言すれば變化せる關係の下に於て人間の生存を保證するに眞に適はしいものでなければ決して成功しない。

八、自然的要素は發展方向を說明するに足らず。

生活必需品と生活改善

斯くて心的要素は發展方向を決定するものではない。何となれば、それは外的必然性に依て導かれる補助力にすぎないからである。而らば眞正の決定力は何處に存するであらうか。生產力の不斷の成長を促し、此を一定の方向に向はしむるものは果して何物であらうか。吾人は此問題に對する解答をマルクス及びエンゲルスに見出すことは出來ない。而も唯物史觀の運命は一つに此問題に懸てゐるのである。今此原因を自然的要素に求め樣とすれば、全く困惑するの外はない。地方の地味、氣候上並に全動植物は長い年月を通じて同一であるのに、住民の社會的、文化的關係は根本的に變化してゐる。自然の利用法は從來と違つても其變化の原因は自然其自體の中に存するのではない。人間が飼養しなければ牛は初めから獨りで鋤は曳かぬであらう。人間の心理的資質とても發展の原動力となる程斯く根本的に變るものではない。そこで斷へず新なる生產力の發展を促かす自然的過程は、食糧生產地を狹少にし集約的經濟を促す自然人口增加だけだとい事になるが之とても確かに刺激となるには違ひないが强制となるものでない。人口と財貨との不均衡は他方に於いて移住、新領土の征服、小兒死亡の增加に依て平均される。假りに財貨蓄積の增加、從て生產力の膨脹を促す絕對的强制力が人口增加に由來するものであるとすれば社會全體の最も緊切なる欲望が滿足された曉には此强制力は其の作用を停止するに到るべき筈である。併し乍ら事實は決してそうでない。社會の全員が悉く生活必需品に事缺かなくなつても、社會の發展は須臾も停止しない。寧ろ生活改善に向つて進む。之まで最も緊切だつた欲望が滿足されると新なる欲望が頭を擡げる。何故そ

うであらうか。何故此欲望が起て他の欲望が起らないのだらう。何故、事實、欲望滿足の方法は一つしかないのだらうか。欲望の次から次ぎと現はれて來る順序が明かに分て、何れの欲望にも其滿足方法が唯一しか無い場合には、生產力發展の方向は明瞭り分つてゐるから其法則は認識されるし其過程も豫め決定出來る。併し斯樣な强制的性質を備へてゐるものは唯直接生活必需品の欲望だけである。といふのは、人間は此欲望滿足の唯一の方法を考へ出さなければ必ず死ななければならないからである。所が人間が如何にすれば生活改善が出來るかといふ其方法の問題になれば、之に對する解答は樣々である。十五世紀には印刷術發明で、十九世紀には鐵道、電信のお陰で漸く西歐社會は沒落を免かれることが出來たのだと眞顏目に主張する人があらうか。勿論西歐社會は是等發明無くば今日と全く違つた狀態となつてゐたであらう。が是等の發明なくとも勿論存續したらう。而らば、社會が或種の欲望を他の欲望より遙に緊切と認めたり、他の滿足方法を顧みないで或滿足方法を選ぶ事に決めるのは、何等か其處に選擇の標準が存在するためであらうか。種々の集團が同樣の出發點から、出發し乍ら、斯樣に選擇を異にしたために、時の經過と共に遂には全く違つた狀態に到達することがある。此事實を認めれば、發展方向が全く劃一であるとか、發展方向が人間の意思に無關係だとは言へなくなる。

一定の生產力に適應する生產關係は唯、一種類しかなく、この生產關係には特定の階級組織、國家形態、觀念論各々一種類しかないといふ主張も亦同樣に正しくない。此の場合若し社會が、不利不完全乍らも他の生產關係、階級組織、國家形態、思考形態の下に生活する場合があるとすれば何處にかゝる必然性が存在するであらうか。既に生活必需品に對する欲望が此必然性を說明するに充分でなく、又、他の生活形態を選擇したために破滅の刑罰を受ける事がないとすれば、此社會發展の方向は一義的に決定できるとは言へなくなる。

マルクスの見解に依れば社會全體の生活意思の外には又一つの指示器が存在するものの如くである、又曾て充分意識に現はれた事のない必然性が存在して、之が何時の時代にも、當時の技術的狀態から可及的多量の財貨を生產し得るが如き關係を造り出さしむべく人間を强制するものの如くである。併しこれは全く出鱈目な主張だと思ふ。多數の人間が欲望滿足の手段を充分持合せて居る場合に、唯だ技術上可能であると言ふ理由だけで更に多量の財貨を生產せざるには居られないと感ずるであらうとは怎しても思はれないし又證明するのも難しい。加之、此の可及的に最高額の財貨を生產せんとする此本能的努力は極めて不確定の規準であるから、之に依て、進化方向の一義性及び必然的過程を充分に說明する事は出來ない。その上にこの中には一定の新生產力の創造を促す强制力も見出されない。

何れの方面から觀察しても滿足すべき說明は到底求められない。唯、余は生產力は斷へず成長すべきものであつて、其成長及方向の法則を其自體の中に備へてゐるが之は到底說明出來るものではないと主張するに止めて置く。

九、唯物史觀の第一の進展。
條件としての生產力、

發見的原理としての唯物史觀

マルクス及びエンゲルスの唯物史觀に纏はる種々の困難や不備は啻に其反對者許りで無く其信奉者否其創成者自身にも既に明かになつた。併し彼等は均しく是等の缺陷が其根本的見解の中に如何に深く根差してゐるものであるかを少しも認めなかつた。唯だ特殊の場合に曖昧な同意や却て其價値を貶す樣な解釋を與へてそれで一切の非難を排除し得たと妄信したのである。併し爰では此以上斯種の議論を問題とし度くはない。唯物史觀の全體の核心に觸れた論評こそ初めて大いに吾等の興味を唆るに足るものである。其處で吾々は爰でマルクシズムの本來の信奉者達が、是等の缺陷に氣付いた後、如何なる方向を取て此理論の改良を企てたかといふ事を有體に述べて見やうと思ふ。

先づ一八九四年社會主義者パウル・エルンスト Paul Ernst は「ノイエ、ツアイト」紙上に掲載したメエリング Franz Mehring の「レッシング物語」を駁した一論文の中で說明して謂ふ。マルクスの言明に依れば、經濟的構造が活動するためには怎うしても心理學に移植されなければならぬ。人間の行爲を決定するものは實在其者では無く、實在の中、事實上人間の眼に映ずる所のものである。故に人間の行爲は經濟關係及び人間性の一產物であると觀る事が出來る。吾人は又生產過程以外に人間の可變的性質を研究し其心理學、聯想力、論理學を研究しなければならない。若しさうでなければ吾々は常に過去の人間に近代的思想を强ふるといふ可笑しな事になる。人間が自ら造り上げた實在の肖像が時代の發展に伴れて漸次、實在其者に著しく類似して來た事は確かである。之がため觀念論的要素の影響も次第に薄弱となつた。併し乍ら翻て原始の民族に在ては宗敎は屢〻生產の促進手段とはならないまでも、少くとも之が阻止手段となつたのであるから、觀念論的要素の經濟關係の構成に及ぼした影響は極めて大なるものがあつたと。

間も無く英國の社會主義者ベルフォト・バックス Belfort Bax は之と同樣の見解を述べた。彼も亦、宗敎、藝術、道德を均しく經濟關係から說明することが出來るといふ事には反對である。謂へらく、經濟關係は寧ろ協同的要素の一つに過ぎない。此要素以外に人間の中には自律的の發展を營む『根本的の心理學的傾向』が存在する。歷史を播けば概ね、或る時代には或種の要素が特に優勢であり、又他の時代には他の種の要素が特に優勢であつた。基督敎發展史を支配するものは觀念論的要素であつた。今日其れが看取されないのは、現在に於いて經濟的要素が利害の前面に餘りに露骨に現はれてゐて、動〻もすれば、此經濟關係を從來の總ての時代に推し及ぼさんとする傾があるからである。

カウツキイは之を駁して謂ふ、心理學的要素は確に疑も無く存在する。併し人間の心的資質は歷史の經過に伴れて變化するものではないから不易のものと觀て差支へない。從て變化に對する認識が問題となる場合には之を閑却して差支へない。而して此變化は可變的要素即ち生產力の發展に依てのみ說明する事が出來ると。所がベルフォト・バックスは心理學的要素の不易性を烈しく爭ひ、經濟關係に依て說明する事の出來ない觀念論的構成物の存在する事を飽くまで主張する。彼は此の一例として哲學を引合に出した。謂へらく、確かに哲學は經濟的發展が一定の階級に達した場合に於て初めて生れる。併し乍ら此事あるが爲めに哲學は唯、經濟關係からのみ說明されるものと信ずるのは誤謬である。哲學は自然及人間を精密に觀察することから發生し、かくて一個の首尾一貫せる思

想的進化を形成するに到るとの事實を會得しなければ、各種の相異れる哲學體系が相前後して發生するの事實は到底之を理解する事が出來ない。唯物史觀の主張が、唯、一定の精神的現象は經濟の一定の成熟程度に於いて初めて現はれるものであると言ふだけであるならば、唯物史觀は『若し詩人は食べなくなれば詩作しなくなる』と言ふ樣な、毒にも藥にもならない平凡な主張に墮してしまう。併し乍ら若し唯物史觀の主張が人間の生活方法の說明に存するならば、例之、人間が何故に加徒力敎徒となつたり、或は他の信仰に歸依するに到るかといふ事を說明するに在るならば、唯物史觀は又一個の匿證佯爭の譏を免かれない。何となれば、此事實が經濟關係から充分に說明され得るといふ事は全く疑問に屬するからであると。其故にバックスの見解に從へは唯物史觀は左の如く改良しなければならない。即ち、人類の發展の中には二個の主要なる要素が存在する。其一つは、人間の先天的資質に根差して其種類及び强度共に可變的な心理學的衝動であつて、他の一つは外的影響である。勿論經濟的影響は其外的影響の中に在て最も有力なるものであるが、併しそれだけが活動するものではない。歷史は是等諸要素の不斷の交互作用を續げなければならない。是等の兩系列は或程度まで別々に其自身一貫せる因果系列と考へて差支ないと。

カウツキイは之を反駁するに當て再び前述の議論を繰返した上に、左の如く述べた。曰く、唯物史觀は決して心理學的要素の協同を否認するものではない。唯だ唯物史觀は、人間の精神が社會を動かすのは經濟關係の主人としてではなく其從僕としてである、と言ふのである。人間精神に其任務を附與し、彼に其解決の手段を提供し、かくて又其結果を決定するものは獨り、經濟關係あるのみである。哲學の歷史は因はれざる自然認識の成長に依存するのみならず又技術の進步にも依存する。何となれば自然征服の要求からのみ、自然の觀察は認識となり得るからである。總ての技術的方法――例之數學も之に屬する――もこの意味に於て技術其者の一部である。個々の人間は發展を遲滯させたり、促進さす事は出來るが、決して其發展の方向を決定する事は出來ないと。

エルンスト及びバックスの獨特の解釋は尙不充分たるを免かれない、寧ろ唯物史觀の個々の誤解に對するカウツキイの反駁こそ全く當を得てゐるが兎角、唯物史觀の最大の弱點が社會主義者の側から取扱はれたのは此論爭を以て始ると言ていい。ここで惹き起されてゐる問題は畢竟するに生產力の其時代時代の狀態は單に特定社會の思惟並行動の活動範圍を示すに過ぎないものではないかどうかといふ事である。曰く、此範圍內に於ては人間精神の創造的活動、バックスの所謂心理學的要素に對して自由活動の餘地が與へられる。此人間の精神の創造的活動は經濟的關係に依て其方向を決定されるものではない。そして、これが當に肝心の點であると。之に對してカウツキイは根本に於て唯、次の反駁する許りである、精神は經濟關係の從僕としてのみ活動するものである、從て又發展の方向は精神に依て決定されるものでは無く、寧ろ經濟關係に依て決定されるものであると。併し乍ら彼の此見解は、依然として純然たる獨斷的主張に止つて、進んで經濟關係の斯かる顯著なる機能を明かにする何一つの證明も與えず、その上斯樣な證明を試み樣ともしない。

既に此論爭に於て宗敎的觀念は生產關係に依存するや否やの問題が一つの役割を演じてゐるのは決して偶然の事ではない。何となれば、一般に宗敎的觀念の生產關係に對する依存關係を證明する

のは事實上極めて困難な事である。況してや前者が一途に後者にのみ依存するといふその依存關係を證明する事は更に困難な事であるからである。其後間も無く佛蘭西の社會主義者ジョルジュ・ソレル George Sorel は次の樣に述べて居る。曰く『唯物史觀は、宗教の役割如何に對して充分滿足すべき理論を與へない中は、決して歷史を充分に說明し得たとは言へない』と。かくて彼も亦唯物史觀の根本的改革を企てるものである。經濟的發展の法則が存在して、之に依て經濟的發展が人間意思と無關係の自然過程として現れるものであるといふ事は彼も承認する。併し乍ら彼の見解に依れば、經濟關係の下層建築――彼はマルクスの用語を借用するが、其用語の意味を全く變へてゐる――を土臺として人間の自由意思が社會的、政治的秩序を更に彼の所謂總ゆる種類の精神的構成物を建設する。彼は歷史の經過は物理的現象とは異て之に實驗的方法を應用することは到底出來ないから、之を因果的に解釋する事は全く不可能だと認のた。謂へらく、經濟の形態に對する政治的、法律的形態の依存關係は、之を證明し得る限りに於ては、決して機械的な、而も嚴密に確定的な因果關係と觀る事は出來ない。唯、此依存關係は、相應關係を經驗的に確定したものに外ならない。爰に於いて眞に根本的な歷史の問題は『特定の條件の下に置かれた人間の集團は如何に行動するか』であると。之と共に又極めて重大な見解が發表された。之に依れば經濟關係は決して法律、國家、世界觀の構成或は變化の原因ではなくして寧ろ單なる條件に過ぎない。變化手段が其時代の自然的手段及其科學的知識の中に與えられて居ない場合には、人間精神と雖も何等の變化を企てる事は出來ないのであつて、此意味に於いて人間精神は經濟關係に縛せられゐる。恐らくフリイドリッヒ・バルバロッサ Friedrich Barbarossa の時代に蒸汽機關を發見し之を使用することは出來ない相談であらう。同樣に、十八世紀の人間はニイベルンゲンの歌詞を作ることは出來ない。何となれば彼等の詩作は之に適應する生活關係に於て初めて出來るものであるからである。併し乍ら蒸汽機關もニイベルンゲンの歌詞も共に經濟關係の生んだものではない。歷史の任務は、社會、國家、精神的文化の變化を生產力の發展から說明するに在るのではない。其時代時代の生產力發達の狀態から窺知し得るものは唯其時代に於ける人間生活の活動の限界たるに止まると。

此見解は最近の指導者エドアルド・ベルンシュタイン Eduard Bernstein が之を採用するに及んで一層マルクス門下の間に有力となつて來た。彼は之まで既に屢〻個々の論文の中に夙に斯種の傾向を表明してゐたが、今や『社會主義の前提と社會民主黨の任務』と題する著書の中で此議論を巧に綜括したのである。彼は述べて謂ふ、マルクス及びエンゲルスは歷史上に於ける非經濟的要素の影響を初めから輕蔑した。其故に彼等の見解は修正を必要とするのだと。謂へらく、『唯物史觀は決して政治的、觀念論的諸勢力の自己運動を否定するものではない。唯だ唯物史觀は、此自己運動が何等の拘束を受けず、無條件的に行はるゝことを爭ふものであり、且つ社會生活の經濟的基礎（生產關係並に階級發展）の發展は結局に於て是等諸勢力の運動に、著しき影響を及ぼすものなることを示さんとするあるのみである。殊に現今の經濟の狀態は觀念論の發展に最も多くの活動餘地を與へてゐると。彼の見解に依れば、マルクス及びエンゲルスの本來の見解に立ち歸ることは一つの科學的退步であると。唯物史觀 materialistische Geschichtsauffassung といふ名稱を放棄してブルジョワ側から提唱さ

れた經濟史觀 ökonomische Geschichtsauffassung といふ名稱を採用しやうとしたのも又彼であつた。彼の見解に從へばマルクスの理論は決して唯物主義的世界觀の流出物ではない。彼は謂ふ、『哲學的若くは自然科學的唯物論は宿命論的である。マルクスの史觀は決して然うではない。彼の史觀は國民生活の經濟的基礎が此生活の構成に對して唯一の決定的な影響を與ふるものであるといふのではない』と。ベルンシュタインは經濟的原因以外に、一方に於いて、物理的勢力、他方に於いては、理想達成への努力を歷史の原動力と認める。從て彼が又、社會主義の勝利を、內在的な經濟的必然性に期待しないで、寧ろ社會主義的理想に對する勞働者階級の獻身的努力に期待した事は彼としては當然の事である。彼謂へらく、社會民主黨は傳來の教義を批評的に審判し且つ『その淺薄なる唯物論が、頗る且つ最も容易に人を誤らしむる觀念論である』といふ點を指示して呉れる所の一人のカントを必要とする。『凡そ理想を侮蔑し、物質的要素を發展の最高力に登すことは、自己欺瞞であつて、この自己欺瞞は常に其當事者の行爲に依て裏切られたし又將來としても裏切られるであらう』と。

カウツキイは此度も亦其著『ベルンシュタインと社會民主黨綱領』（一八九九年）の中で、本來のマルクシズムを辯護するに努めた。彼は此書の中で、唯物史觀は純然たる經驗的方法に依て發見された理論であると述べた後、更にベルンシュタインを駁して謂ふ、ベルンシュタインは唯物史觀が間違てゐるといふ事を歷史的事實に依て論證しやうとしないでマルクス及びエンゲルスの發言に煩瑣的な解釋法を加へた許りで滿足してゐる。カウツキイは更に難詰して、彼（ベルンシュタイン）は宿命論、機械論、及び歷史的必然性を許すことの出來ない方法に於て混同したと謂ひ、最後に自分の見解を纏めて、次の如く述べてゐる、曰く、『歷史は唯〻經濟的原因許りから說明の出來るものではないと主張する人々は、而らば如何なる法則に基いて心理學的、倫理的要素は作用するものであるかと言ふ其法則を論證するの義務があると思ふ。そして若し之が出來なければ、發展の合法性は最早主張出來ない譯であるし從て之と共に社會發展の方向を明かにすると云ふ可能性も又亡くなつてしまう。然すれば、科學的社會主義は脚下の土を奪はれてしまひ、其要求の實現といふ事も再び空しい希望に墮し終るであらうと。彼謂へらく、ベルンシュタインは斯樣な究局の結論を引出すのを避けて、社會主義を科學的に確立することに沒頭し乍ら而も歷史的生起の必然性を否定した。是に於いてマルクス主義的方法に對する彼の改良的企圖は其實改良に非ずして却て單に矛盾せる唯物論に墮してしまつたのである。

吾人が此ベルンシュタインに依て代表さるゝ思想を眞面目に考へてゐると、歷史的發展の方向を不變のもの、計慮し得るもと考へることを怎しても斷念しなければならない。ベルンシュタインの樣な考へ方をすると生產力並に生產關係は寧ろ生起の單なる條件と化して、最早一定の過程を强制する唯一の原因ではなくなり、遂に畢竟大なる原因合成體の一部に過ぎないものとなつてしまう。而らば社會、國家並に世界觀上の一定の變化は如何なる生產力の變化に基くかを論證する事は、個々の場合に於て最早問題とはならないがその代りに今度は、此生產力が此變化に幾何の分前を持つかといふ極めて厄介な穿鑿をしなければならなくなる。其故にベルンシュタインの見解の信奉者達が、

ベルンシュタインの見解に依れば、唯物史觀は歷史的現象を解釋するための確定的理論ではなく、又過去及將來の一切の變化を解釋する場合に據る可き規準でもなく、寧ろ唯かゝる解釋の要求に對して、一應一定の方向を示して與れる指針であると力說せるのは至極尤な次第である。そういふ意味で彼等は唯物史觀を一個の方法――此言葉を彼等の思想に對して使用することは一般の慣用語法に適しないかも知れないが――だと稱してゐる。又或人は唯物史觀を發見的原理と呼んでゐるが此語は前のに較ればもつと正しい言ひ方であらう。斯樣な譯で一切の謎を解決すべき筈のこの唯物史觀は總ての歷史的現象の中其幾何を果して生產力の影響に歸す可きかを研究する場合に、其研究者の單なる諮問機關位になり下つてしまつたのである。

カウツキイがこのベルンシュタインの見解を評してマルクス及びエンゲルスの眞意は斯樣なものではないと云つてゐるのは疑も無く正しい。何となれば全歷史の過程の方向は一定せるもので且つ計慮し得ることが出來るといふ事はマルクス及びエンゲルスの本質的部分であるのに對し、ベルンシュタイン及び其一味は此部分を全く放棄してしまつたからである。彼等は自分で考へてゐる以上に本來のマルクシズムから遠く離れてゐる。而も彼等が自己の見解を本來の唯物史觀の一進展であり、改良であると考へてゐるのは實は全く見當違である。寧ろ彼等は事實上原則として全人類の歷史的發展に及ぼす經濟現象の影響を久しく研究し乍ら、その唯一の影響力を敢て力說しないで、所謂ブルジョワ的科學の範圍に足を踏み込んでしまつたのである。

十、唯物史觀の第二の進展。

倫理が生產力の方向を決定するとの說

唯物史觀の信奉者が概ね此道を步むのを好まないのは別に怪むに足りない。併し乍ら彼等が盲目的の敎義信仰に囚はれない限りは、生產力發展の必然性は怎うしてもマルクス及びエンゲルスの敍述からは理會出來ないことを承認しなければならぬ。其故に彼等としては何等か之に對し滿足すべき新なる說明を見出さなければならない。そこで他の人々の模索的な試が行はれた後、マックス・アドレルは是等の試の後を承けて爰に一つの興味ある研究を試みた。

彼は、發展の方向決定を生產力の一部に過ぎない自然的要素から說明する事が出來ない事を認める。是等自然的要素は事實上唯〻條件に過ぎないのであつて、幾多の發展可能性が存在する。マルクスの意味に於る發展過程の一義性を救うとすれば、其救濟の道は唯〻一つしかない。それは、發展過程の方向を決定するものを人間の資性であるとすることである。所與の條件の範圍に存在する幾多の可能性の中、一定の方向に展開する一つの可能性を選擇させるものは人性の本質に存在する必然性でなければならぬ。アアドレルは其理由を述べて謂ふ、凡そ人間は生れ乍ら社會的本質である。だから倫理的原則に依て組織された共同生活の實現を努むるものである。人間は生れ乍ら最高の統一的目的を實現すべき使命を有する。人間は其本質上、生命ある統一的努力であり、活動體であつて此活動體は其自體の中に自己の規準を有つ。同時に總ての人間には他者を犧牲にして初めて獲られる個人的幸福。安寧を追求しなければ止まない衝動の存することも亦確かである。此衝動は社會的

統一を求むる總ての努力と正に相反する。夫々異つた幾多の價値評價に支配されてゐる個人が集合して、相互に戰てゐるが漸次に共同社會の理想が愈〻勝を制するに到る。斯樣な過程を實現するの方法は共同勞働である、普遍妥當的形式を求めて止まぬ勞働過程が、時の經過に伴れて、斷へず其範圍を擴大し、且つ內的にも其本質を變化するといふ事實にこそ進歩といふ概念の眞の內容は存する。かくして非論理的のもの非倫理的のもの、忌む可きものは、愈〻益〻同時に非社會的として又生存に有害のものとして現はれる。

斯樣にアアドレルに在ては人間の胸奥に由來根强く巢喰てゐる社會的共同體の觀念が、歷史の最も力强い原動力として現はれてゐる。他の生產力並に生產關係は之が實現の補助手段となるべき外的機關たるにすぎない。總て機械に依て生產される物が、其構造の上から其生產に適せる物許りに限らるゝ樣に、社會的に向けられたる意思も亦其社會に存する生產力の助を以て出來る範圍內のものを創造し得るにすぎない。各時代の社會的理念の持てゐる影響力の限界は實に是に存する。又其特定の內容から見れば一定時代の諸觀念は經濟狀態に依て定まる、乍併唯だ最高目的のみは人間の精神生活の形式に依て、或はアアドレルの好んで謂ふ形式的心的に決定される。アアドレルは概念と經驗の關係に對するカントの有名なる概括に因んで、自己の見解を左の如き簡潔なる形式に綜括する、即ち『物質を伴はざる觀念は無力であり、觀念を伴はざる物質は方向を有しない。』又他の個所にて謂ふ『斯樣に物質的條件は決して倫理的理想を創造はしない、それは唯だこの理想に歷史的內容を附與するに過ぎないものであり、この理想實現の方法を決定するに過ぎないのである』と。

最後にアアドレルは此點から更に最後の重要な一歩を踏みだしてゐる。倫理的價値に依て導かれた人間の力が結局、生起の方向を決定するものであり從て其時代々々の生產力は單に社會が最高目的に對して接近し得る其程度を示す尺度となるに過ぎないとすれば、歷史的過程の內容は此倫理的價値を漸次に實現する事に外ならない。而して此倫理的價値は無意識的に人間其自身の中に永久に活動する根本的動機として內在し、意識に依て次第に最高原理として認識されるに到る。勿論歷史上に於ける倫理的價値評價は其自身として現はれないで、寧ろ內在的に作用する因果的要素として現はれる。而も倫理的評價は、總ての人間意識に同樣に作用するものであるから因果的觀察をなす者に取ても亦社會的生起の方向を普遍的に決定する力として現はれる。アアドレルは謂ふ、歷史は倫理の進行である。『歷史的過程が因果必然的に、倫理が見て以て正しいとする目的に向て進まざる可からずといふ事實は社會生活の因果發生的研究の益〻明瞭に認めしむる所であるが之も亦一種のより確實に證明することの出來る豫定の調和の如きものである』。倫理的意思の衝動に驅られて、最高の價値を實際に實現させるものは自然的生產力の機關であつて、此機關製作の使命も又當初から爰に存することは明白である。

アアドレルもマルクス及びエンゲルスの思想領域を放棄してしまつた事は確かである。勿論彼はマルクスと同樣に發展の一義的なること、豫め決定し得可きことを飽くまで主張する。併し彼は生產力の中に倫理的要素を採り入れる事に依て此目的を達してゐるに對し、マルクス及びエンゲルスは、歷史を說明する場合、社會主義を基礎づけする場合にこの倫理的要素を全く驅逐した事を自ら

誇とした位である。勿論彼等と雖も內心に於ては、歷史の進行に伴れて結局過去の狀態より倫理的に一層健れた或物即ち社會主義社會が之に適はしい觀念の世界を伴ふて現はれるのを確信して疑はなかつた。併し社會理想が歷史的發展の方向を決定するものであるなどといふ事は到底彼等の承認しない所であらう。何となれば彼等の觀察方法に於いては、感覺的衝動以上に倫理的價値評價が遙に優勢であるといふだけでは決して滿足はしないし、又社會主義を唯一の可能な或は常に優勢な理想であると言ふだけでは決して承知しないからである。

アアドレルの理論の弱點は實に爰に存する。人間の行爲を決定する倫理的價値は唯だ社會主義的理念だけであらうか。他の種類の倫理的價値、宗敎的觀念、或は、自由、眞理、國體宣揚等の觀念は存在し得ないであらうか。若し在るとすれば、それは偉大なる經驗論者ランケ Ranke の歷史觀に著しく接近することとなる。彼の歷史觀は其反對者、信奉者共に屢〻之を甚しく誤解し、又從來社會主義者に殆んど顧みられなかつた。ランケに在ても又歷史の進行を決定するものは彼自ら謂ふが如く、倫理的力、道德的活動である。唯だ彼の「觀念」は價値の階等の中に整序されてないし、又觀念發生の順序が豫定されてないだけである。惟ふに一時代に如何なる理想が支配したか、其等の理想が相互に如何樣に交錯し、而て其獨特の交錯の仕方に依て其時代の性質を決定したかは寧ろ當該時代及び當該國民に對する歷史的研究を俟て初めて確定さる可きものである。社會的共同體の理想が常に人間の胸奧に存在するの事實は姑くアアドレルと共に之を認めるが、この理想が結局、之と共に活動してゐる自然的、心的勢力を壓服して唯獨り、生起の方向を決定す可きものであると誰が主張し得やうぞ。又總ての時代を通じて左うであつたと誰が主張し得やうぞ。本來社會的共同體の理想が何等の拘束を受けること無く、內在的な方向決定力として妥當するといふ事は歷史的事實として經驗的に論證することも出來なければ又唯一の可能なる假說として論理的に之を是認することも出來ないのである。

十一、結　論

唯物史觀に對する此最近の改良的企圖の當否は姑く措くとしても旣に此事實は曩に他のマルクシストの勢力失墜と相俟て、唯物史觀の弱點が漸く其信奉者達にも亦明かに氣付れて來た事を物語るものである。彼等は人間共同生活の總ての變化の原因を生產力變化の事實に求むる。併し彼等は何故に生產力其者が自ら永續的に變化すべきものであり且つ何故に此事實が必然的に社會主義の方向へ趨く可きものかを說明する事は出來ない。唯物史觀の信奉者達は今や此生產力變化の方向決定力を放棄するか、左もなければ其論據を、人間行爲を一定の方向に導く所の價値評價に求む可きかの退引ならぬ破目に逢着してゐる。何れにしてもマルクス體系の頑固さは緩和されるが、それと共に其統一性も失はれてしまう。唯物史觀がブルジョワ的歷史哲學並に歷史記述法と根本的に相違する所は、生產適程を以て原因として强制的に働く力であるとする見解と、倫理的要素を歷史上に於いて全く無力と觀る見解に基く。是等の見解が今や全く放棄される以上は、殘る問題は唯だ經濟的影響と精神的影響とその何れが大なるかといふ其影響大小如何の問題である。所がこの問題は何人も意見の一致しない問題である。何となれば、この問題は經驗的研究の方法に依ては決定出來ないか

らである。總て立論の前提は純粹經驗の範圍を超越するものであり又さうあらねばならぬ事は吾々の知る通りである。乍併、吾々は縱令トオマス・アクイナス、カント、ヘエゲル、コムト、マルクスのものたるを問はず凡そ一定の前提を獨斷として或は單に科學的に是認された假說として他に强ひてはならない。若しそうでなければ吾々は必ずや一個の新なる煩瑣學の迷宮に陷ることになる。吾人の眼には總て斯種の假說は同樣の權利を持つものであつて、經驗的事實を闡明するに如何に役立つかといふ事に依て夫々の價値を證明しなければならない。

此經驗的批判的觀察方法から本來のマルクスとマルクスの獨斷盲從的崇拜者に到る橋渡しは一つもない。斯種の經驗批判的觀察法から見れば、唯物史觀を單に一つの發見的原理と考へ、即ち生產關係を單に歷史的生活の條件と考へる人々と行動を共にする事は考へられる。

本來の儘の唯物史觀は其構造が如何にも首尾一貫してゐるので吾々を魅惑する。併し乍ら其れは、其自身合目的に變化する所の生產力といふ曖昧な綜合概念を持ち出しただけで歷史の過程を表面上だけ簡單に解釋してゐるのである。勿論唯物史觀の影響は極めて著しい。何となれば、唯物史觀は諸種の原因中之まで歷史の發展に對する意義を全く閑却されてゐた部分即ち經濟的要素を、特に而も極端と思はるゝ迄に利害の前面に拉し來り、而して社會階級の構成といふ樣な之まで全く看過されてゐたが而も非常に重要なる現象に對して甚大の注意を喚起させたからである。併し乍ら唯物史觀を其儘應用すれば歷史の戲畫が生れる。唯物史觀は事實を根本的に認識し、研究した結果として生れたものではなく寧ろ個々の觀察の結果を性急に且つ大膽に普遍化する事に依て生れたものである。マルクス及びエンゲルスは西歐民族の歷史の幾分しかを知れるにすぎなかつた。彼等の使用した民族心理學的、宗敎史的資料は極めて貧弱で又之に對する知識の如きも極めて些少のものにすぎなかつた。その上經濟的方面に於いてさへも尙充分の確固たる識見を持てゐなかつた。だから彼等の理論には一時的の試驗的假說に免れ難い總ての證徵を自ら備へてゐた。而るに此理論は確定的敎義とされてしまつた。といふのは此理論は政治的動機から生れたものであり、その上實際運動のために利用されるものであつたからである。總て綱領並に政黨は單なる假說の上に建設する事は出來ない。そこで此假設の中には認識の堅實なる基礎並に事實の將來の經過を計慮する秘鑰の存するとの信念を與ふることに依て僅に此見解に對する歸依者を集めてゐるのである。彼等は歷史を一個の單純なる型の中に追ひ込めて、之を計慮し得可きものとした。だから永久に計慮す可からざる人間精神の創造力を否定するの止むなきに到つたのである。而るに此人間精神無くしては、縱令、經濟に於けると、社會に於けるとを不問、如何に偉大なる人間の事業も、更に如何に新なるものを齎らす發展も之を理解する事は到底出來ない。之なくしては人間は動物と均しく、單に生活必需品の滿足以上に出でることは出來ないであらう。果してそうであれば、見えざる運命や超自然力が吾々の種屬を豫定の方向に押し進めてゐるものだと想像する外はないであらう。勿論人間が其時代の生活關係並に思考方法のために少からず制限をうけることは思惟するに難くないが、若し人間が少くとも此限界以上に一歩でも踏み出さないとすれば、從來と異つた他の狀態に到底するといふ樣な事は決してあり得ないであらう。

新なるものを思考し、且つ創造する天賦の才が人間に依て夫々相違があることは云ふを俟たない。併し、日常の慣習に從て、沈滯した生活を送ることに只管滿悅しきつてゐる人々以外には斯樣なる天賦を全く缺いてゐる人は無い。さればこそ吾々は如何にして天才が其事業を成就する事が出來たか、如何にして一つの新なる科學的發見が生れたか將又如何にして經濟並に國家の變革が一定の狀態の可能であつたかを成程と理解する事が出來る。併し乍ら起つた事は當に起る可かりし事であつて、決して他の事が起り得なかつたといふ理由を論證する事も且又將來起る可き事も豫測する事は出來ない。

勿論諸般の歷史的條件を丹念に考慮すれば、一應は、來る可き事實の可能性の程度と近似性の程度を識る事は出來る。併し乍ら、諸般の起り得可き變化の中で何れのものが實際上に現はれて來るかは一つに此諸般の條件の下に生活し且つ活動する人間の創造的行爲に左右される。若しそうでなければ、生活は依然として化石的形態に膠着し、社會は環境の危險なる變化に對して合目的に反動を與へたり、新なる文化價値を創造したりする能力を喪失する。此力が一民族に存在せる場合には、外的關係は縱令、如何に劣惡であつても尙ほ新なる而も獨特の事業が行はれるであらうし、又縱令如何に深い奈落の底に陷でも軈て又復活するの望がある。

現今の不幸といふ不幸を嘗め盡した吾が國民の唯一の賴みとする所は獨逸精神その者のから湧出する力の泉である。吾國民が余の信ずるが如く、尙ほ潑溂として健在であるならばこの獨逸精神は、吾等の立てる戰場の廢墟を通て自ら活路を求めて、軈て選ばれたる國民同胞の創造的行爲の中に流れ込むであらう。吾々將來の運命を決定するものは、決して盲目的に活動する外的勢力ではなく唯、吾々國民として此創造力を果して內奧に保有するや否やの一事である。

汝の胸にこそ、汝が運命の星は宿るなれ。

と言つた吾が詩人の言葉は全體としての吾國民の上にも亦適はしい。

（終）

（一九二四、六、譯了　一九二七、七、改譯）